

12 セルジュ・ティロシュ

Serge Tiroche

コレクター/イスラエル

文/塩原将志

(アートコンサルタント・アートディーラー)



セルジュ・ティロシュ (Tiroche Deleon Collection)
<http://www.tirochedeleon.com/> 写真



上:2015年のアート・バーゼルマイアミビーチにて開催されたコレクション展の会場風景。南米のアーティストの作品を展示した。
 左:パウロ・ナザレス (Paulo Nazareth) 『BANANA MARKET/ ART MARKET』



8月から公開された映画「アートのお値段」(原題:『THE PRICE OF EVERYTHING』)を拝見しました。この映画は、アートとお金の関係を探るドキュメンタリーとして、世界のアートマーケットで戦うキープレイヤーたちの仕事や証言をもとに構成したものです。オークションニア、アーティスト、ギャラリスト、クリティック、コレクター、キュレーター、コンサルタントといった様々な立場のアートピープルが登場します。スクリーン越しに見ると遠い世界の話のようですが、実は、私にとっては目の前のことでもあります。登場する人物の半分以上は実際に会って話をしていますし、取り引きがある方もいます。その影響力や行動力を映画で改めて見るにつけ、私はものすごい世界で働いているんだと誇らしく感じる一方で、彼らとの差を再認識することにもなります。ジェフ・クーンズ (Jeff Koons) やゲルハルト・リヒター (Gerhard Richter)をはじめ、日本でも名前の知られるプレイヤーが登場するなか、私にとって重要な人物が映画に出てきます。それが今回紹介するセルジュ・ティロシュさんです。

日本でのメディアでティロシュさんを紹介できるようなネットワークを持つところにはほほえないでしょうから、あまり日本で知られてはいませんが、世界のアートマーケットにおいては非常に影響力のあるアートピープルです。代表的な仕事として、ティロシュさんは、『Tiroche Deleon Collection』という名を冠したアートファンドを2011年から運用しています。最低投資額は50万ドル。運用期間は10年のアートファンドです。アートディーラーの家系に育ったティロシュさんはアートのサラブレッド。しかもシテイングループにてプライベートバンカーとしてのキャリアもある金融のプロでもあります。昨今、日本のアート界にも新規参入でアートファンドをつくらうという動きがいくつも見受けられますが、どれも中途半端なもので、はたしてきちんと資産運用ができるか疑わしいものばかりです。一方、ティロシュさんのアートファンドは、徹底的な調査でいい作品を購入するばかりでなく、どの作品もミュージアムピースで、頻りに世界の美術館に貸し出しをしながら、作品の価値を上げています。独自のコンテンツをつくり情報発信を行い、またレジデンスプログラムで若手作家の育成にも力を入れています。

一般的に、利ざやを稼ぐ目的のアートファンドにはいい作品が入りにくいのですが、『Tiroche Deleon Collection』ほど強力な組織と潤沢な資金力、さらには世界中を駆け回る情報収集力があると、自ずといい作品が集まるようです。私がティロシュさんとお付き合いをするようになったのは、2011年にシンガポールで行われたシグナチャー・アート・プライズでした。当時のシンガポールは国が積極的に自国のアートマーケットの活性化を狙って、世界のコレクターを呼び込みを行っていました。このプライズもその一環として開かれたものですが、そこで私たちは出会いました。様々な情報交換をするなかで信頼関係を築くことができ、今では作品を買う際にそのフェアバリューがいくらなのかを相談ができるほどのフレンドな関係になっていきます。ティロシュさんの言葉でとても印象に残っているものがあります。それは、とある日本人がオークションで高額落札をしたときのことでした。ティロシュさんはそのセールについて私に『Good sale, Awful purchase』だと言いました。日本語にすれば、「良い売りだけど、悪い買い物」つまり「高買い」ということです。コレクターにとって、自分の買った作品が値上がりすることは、たとえ作品を売る気がなかったとしても、うれしいことです。その意味



ニコラ・コンスタンティノ (Nicola Constantino) のビデオインスタレーション『VANITY』



オス・ジェミオス (Os Gemeos) 『Sem Titulo』

で、ティロシュさんはアートファンドを運用するなかで、買っても売ってもしますので、その道のプロフェッショナルといえるでしょう。そのスタンスは、規模こそ違いますが、私の仕事とも共通するものです。彼らを選んでファンドに入れた作品は、私たちが購入する上でも大きな指針となります。世界のアートマーケットには知られざる大物プレイヤーがまだまだいるのです。



Vik Muniz 『Portrait of Masashi Shiohara - Pictures of Chocolate』2012年

しおばら・まさし
 1962年群馬県生まれ。87年日動画廊入社。ギャラリー日動ニューヨークINC.代表、89年リオ・キャストリに会い、90年日動画廊にて現代アメリカ作家展『Leo Castelli's Artist』を手掛ける。2004年アート・オフィス・シオバラ設立。nca(日動コンテンツポラリーアート)顧問も務める。「アート千本ノック」と称し、世界中のアートイベントを年間を通じて回る脚力は日本随一。世界のアートシーンの現場で築いてきた人脈とコアな情報を駆使しながら、コレクターが優れたコレクションを形成する仕事に奔走している。